

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00979

研究課題名（和文）日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Pastures in Ancient Japanese Kinai and Neighboring Countries

研究代表者

吉川 敏子（YOSHIKAWA, Toshiko）

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：40297172

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：馬の大消費地であった都周辺の古代牧の実態解明に取り組んだ。実地踏査を踏まえ、近畿古代牧の現地比定や景観復元を行いつつ、文献史料を分析し、近畿特有の牧の歴史的意義を追究した。近畿の古代牧を相対化するために東国や南九州の古代牧推定地も巡見し比較した。それらの調査を踏まえ、近畿の馬牧は、都に収容しきれない貢上馬を放牧し、需給の調整弁となる小規模な備蓄牧として機能したことを指摘した。遠国の大規模な生産牧と近畿の小規模な備蓄牧による馬の運用は、公的な牧のみならず私牧においてもなされ、8世紀には行われていたことを、史料や平城京木簡などから指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

個別の近畿古代牧について、文献史料より得られる情報や地勢から現地比定・景観復元を行い、その歴史的役割や土地利用の変遷を解明した。近畿のみならず北関東・甲信・南九州の牧の故地も巡見し、遠国の広大な生産牧・近畿の狭小な備蓄牧の対比を明らかにした。都での馬匹需給の調整弁となる近畿の備蓄牧の役割を解明することで、都を中心として日本列島を覆う馬の生産・備蓄・利用の大系を提唱した。備蓄牧は都と地方とを結び結節点として歴史的意味を持ち、牧を起点として展開する地域史研究の新たな視点を提言できた。

研究成果の概要（英文）：In our research, we sought to discover what ancient pastures were like around the capital, where a large number of horses were needed. Based on our fieldwork, we identified the location of pastures in the Kinki area and elucidated what they had looked like, analyzed historical materials, and sought to uncover their historical value. For comparative purposes, we visited and compared the presumed locations of pastures in the Azuma and south Kyushu areas. We noted that people had raised a large number of horses in the pastures of the Kinki area, which functioned as small stockpile pastures, playing a role as a control valve of the supply and demand of horses. We also noted that the system involving large pastures for production in remote areas and small pastures for stockpiles in the Kinki area had been adapted not only for public pastures, but also for private ones, and was already established in the eighth century at the latest.

研究分野：日本古代史

キーワード：勅旨牧 諸国牧 近都牧 御馬 備蓄牧 馬寮

1. 研究開始当初の背景

古代社会では馬が現代社会における自動車と同じ役割を果たしており、各階層の人びとが集住する都周辺での馬の役割の多様性がひととき顕著であった。従来の文献史学では、その多様性の中で、馬の個別の役割に関心が向けられ、研究が細分化する傾向にあった。考古学でも、馬具や遺体など馬そのものの事例研究が多い。ここ四半世紀ほどの間に、北関東・甲信地方の遺跡や大阪府部屋北遺跡など、古墳時代から平安時代の牧の検出が報告されつつあるが、その研究は途に就いたばかりであった。両分野の動向を見て感じたところの第1は、馬に関心が向けられる一方で、生産・備蓄を担う牧の実態についての研究が遅れを取ってきたことであった。文献史学では戦前に西岡虎之助「武士階級結成の一要因として観たる「牧」の発展」(『史学雑誌』40-2・3・5・7・8、1929年)があり、長いブランクの後に山口英男「八・九世紀の牧について」(『史学雑誌』95-1、1986年)が発表されて以降、少ないながらも牧の研究が見られるようになっていたが、その多くは制度史研究であった。一方、考古学分野では遺跡の個別研究に収まり、牧の普遍的な特徴まで論じられることは少なかった。第2は、文献史学分野と考古学分野の成果の総合が不十分だったことである。東日本での大規模な牧遺跡の検出に伴う文献史研究者からの提言は見られるものの、残存史料の増加が8世紀以降であるのに対し、遺跡の年代は古墳時代に偏ることが災いし、両分野間の議論の深まりには不十分さがあった。第3は、古代牧への関心が、東日本の牧に偏っていたことである。理由として、文献史料の内容が生産目的の東国の牧に偏ること、生産目的の牧の広大な跡地が現地比定を容易にすること、遺跡周辺の都市開発が緩やかで地形からの検討がしやすいことなどがあげられる。

このように、研究開始当初以前は文献史学と考古学との合力や成果の総合が不十分であり、かつ東日本と異なり、畿内・近国の牧では分野を越える共同研究が見られなかった。このような状況に対し、古代国家全体の馬の利用を理解するためには、都への供給を担う地方の牧と、受け皿となる都周辺の牧の双方の実態を解明する必要があり、特に後者は都における馬の利用に直結する点で重要であると考えた。畿内・近国の牧の立地やその土地利用の変遷は、馬寮などの国家機構の変遷のみならず、都を中心に展開する交通、支配者層と在地勢力との関わり、牧を含む集落の実態など、様々な局面で有機的に関わるはずであり、その実態解明の意味は大きい。遺跡の分かりづらさや史料の希薄さなどの障壁はあるものの、断片的ながら史料には畿内・近国の古代牧の名が残されており、多くの牧が営まれていたことは確実で、その痕跡は各地に残っているはずである。文献史料や地理的条件から得られる情報を加えることで、性格未詳とされてきた検出遺構の中から、牧の関連遺構を抽出できる可能性もある。遺跡を特定し、牧の実態を復元することで馬匹の保有数などを推算できれば、文献に現れる畿内・近国の牧の歴史的意義を、より具体的に論じることが可能になる。このように、研究分野の壁を越えて総合的に分析することで、文献史料・考古資料の乏しさを克服できるとの観点から、これまで等閑視されてきた畿内・近国の牧の実態解明への取り組みを着想した。

2. 研究の目的

本研究は、畿内・近国の牧の現地比定を行い、都での馬の利用を下支えした牧の実態を検討し、牧の機能を介して、都の周辺に展開された古代の政治・社会を俯瞰的・総合的に解明することを目的とした。各研究分野で馬に関わるテーマが細分化していく傾向に対し、文献史学・考古学・地理学の知識を総動員し、畿内・近国の広域を対象として総合的に研究する初めての共同研究である。個別の牧の復元のみならず、牧の諸要素を抽出し、類型化することは、文献に遺らないものも含めた公私・新古・大小の様々な牧の遺跡発見への足がかりとなろう。成果を積み上げ、畿内・近国に展開する牧の運用と馬の流通を提示することは、細分化しつつある様々な研究テーマを有機的に関係づけ、日本古代をより複合的に研究するための基盤を提供することになると考えた。

研究開始当初は外国の牧との比較という視角も未だ十分に高まっていないと感じたため、本研究では韓国の牧を比較対象とし、日本の牧の相対化に取り組むこととした。韓国を対象とするのは、乗馬の風習が朝鮮半島から伝来したのみならず、中国と異なり、広大な放牧地を確保しにくい地理条件を持つ半島との比較が、日本の牧の研究に重要なヒントを与えると考えるからである。韓国ではいまだ牧研究への関心が低かったが、本研究の成果を韓国研究者に提供することで、牧や馬の研究を介した国際交流の気運を作ることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、現地重視で牧の個別研究を行い、その成果を総合して、畿内・近国の古代牧の歴史的意義を明らかにすることを目標とした。そのための方法と当初立てた到達目標を列記する。

- (1)文献史班が、文献史料を博捜して畿内・近国の牧のリスト及び関連史料のリストを作成し、研究の基礎資料として提示する。
- (2)考古学班が、文献史料から推定される牧比定地およびその周辺の発掘調査事例を精査し、古代における地域の環境、土地利用の状況、歴史的景観を検討する。

- (3)地理学班が、現状における微地形を分析し、牧の比定地およびその周辺における環境を検討する。
- (4)(1)～(3)を踏まえ、牧の有力な比定地を選定して現地踏査し、文献史・考古学・地理学の3方向から牧の復元を行うとともに、牧を含む地域の土地利用を解明する。
- (5)(1)～(4)を踏まえて、立地・地形・地質・景観・随伴遺構・地名などの牧の諸要素を類型化し、今後の牧遺構の発見のための指標を作る。
- (6)畿内の地方官衙、古道、牧を俯瞰する牧マップを作成し、都を中心とした交通網に、牧が果たした役割を明らかにする。
- (7)官私を含めた牧の領有者と在地との関わりを文献と考古遺物から明らかにする。
- (8)日本と朝鮮半島の牧を比較検討して双方の特徴を抽出し、馬の飼養技術伝来の経緯を明らかにする。

当初、(3)ではGISの技術を駆使して推定地の微地形を可視化し、地形図や数値標高モデルなどに基づいて検討することを計画していたが、調査過程で近畿古代牧の規模が想定よりも小さく、有効性を期待できないことが分かり、活用がかなわなかった。

4. 研究成果

本研究は、文献史班、考古学班、地理学班、朝鮮半島分析班の編制で課題に取り組み、研究会や現地踏査では各分野からの参加を原則とした。まず、文献史料を博搜して畿内・近国の古代牧のリスト及び関連史料のリストを作成することから着手し、古代牧のリストを元に比定地およびその周辺の発掘調査事例の収集および地理的条件の抽出を行った。それらの情報を研究会で共有し、予備的学習を行った上で、現地踏査し、さらに踏査の成果についても研究会で意見交換し、古代牧比定地の古代における地域の環境、土地利用の状況、歴史的景観を検討した。このような、文献史・考古学・地理学の3方向からの牧の復元作業を重ねて、立地・地形・地質・景観・随伴遺構・地名などの牧の諸要素を類型化し、今後の牧遺構の発見のための指標を作ることに努めた。以下に各年度の経過と成果を記す。

2018年度は補助事業の初年度として、研究代表者・研究分担者で手分けをして、近畿の古代牧の個別研究の調査・分析の積み上げに努めた。各自の研究状況は、随時研究会の形式で報告して、情報を共有し、積極的にフィールドワークを行った。現地研究者の協力も得て、近畿古代牧の推定地である大和国室原牧(奈良県田原本町)、摂津国豊島牧(大阪府箕面市)、大和国宇陀肥伊牧(奈良県宇陀市)、伊賀国広瀬牧・薦生牧(三重県名張市)を複数名で現地踏査し、現地比定の妥当性を確認し合った。また、『日本書紀』に「甲斐の黒駒」「駒ならば日向の駒」と歌われ、甲斐・日向が古代の良馬の産地と認識されていたことを踏まえ、山梨県(北杜市・南アルプス市等)と宮崎県(串良町都井岬)・鹿児島(志布志市・姶良市等)を巡見先とした。いずれにおいても、現地の研究者にご協力をいただいて、地域ごとの牧の特質を認識し、これにより近畿の牧を相対的に理解することが可能となった。都井岬では放牧され自然繁殖を行う岬馬の実見と、現地職員への聞き取りにより、自由放牧による牧運営の環境条件などを学んだ。都井岬で得た知見は、牧の規模を検討する際の指標として、その後の研究に大いに影響を与えるものとなった。

2019年度は補助事業の2年目として、初年度の成果を踏まえ、概ね3つの方面に重点を置いて研究活動を行った。まず1つめは、朝鮮半島の牧の故地を巡見し、韓国の研究者と交流したことである。韓国における古代牧の研究自体がまだ始まったばかりで、巡見による直接の成果をあげるには至っていないが、国際的な視野を持つことの重要性を確認した。近年、日本において東アジア全体を視野に入れた、考古学を中心とする馬の研究が盛んになりつつあるが、その分野の成果に学びつつ、引き続き関心を持って取り組みたい。2つめは、平安時代の勅旨牧設置4カ国のうち、信濃国と上野国の古代牧推定地を巡見し、近畿および前年度巡見した甲斐国や日向・大隅国の古代牧比定地と比較検討したことである。上野の場合は、榛名山噴火の火山灰降下により、通常は遺らない古墳時代の地表面の人為的痕跡が遺存し調査されてきたが、現地に立ち、地形を実見しながら物的証拠を持つ牧の景観復元について学べたことは、これを畿内の古代牧に置き換えて検討する際に、両地域の相違点も含めて大いに参考となることの手応えを得た。また、信濃国望月牧では実際に土塁の痕跡を地表にとどめており、具体的に畿内牧の故地を検討する際には、地上の微少な痕跡にも留意すべきことを認識させられた。3つめは、昨年度に続き、個別具体的な畿内の古代牧についての検討を進めたことである。各研究者が個別に、前年度巡見した近畿古代牧比定地への2回目、3度目の巡見を重ね、調査・検討を深化させた。2019年度までに成果がまとまった研究については、随時、研究者の単著論文として公表した。

2020年度は、研究助成の最終年度として、研究成果を整理・総括し、報告書の作成に取り組んだが、コロナウィルス蔓延の影響を受けて遅延したため、研究期間を延長して2021年度に研究成果報告書を刊行した。

『日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究(課題番号 18K00979)平成30年度～令和2年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書』(研究代表者 吉川敏子 2021年10月)

吉川敏子「日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究」

「近畿古代牧変遷の概観 付：近畿古代牧リスト(稿)」

鷲森浩幸「大和国西部の牧と馬」

吉川真司「河内国楠葉牧の再検討」

佐藤健太郎「鳥養牧について」

山中章「布施内親王墾田地から東寺垂水庄・垂水牧へ～条里型地割形成前後の摂津国垂水牧～」
巻頭の原稿は、本研究課題の活動記録として作成したものである。

馬の大消費地であった都周辺の古代牧の実態解明に取り組んだ本研究課題では、古代の牧を、馬を生産・放牧する生産牧と、官司や貴族が当面利用しない馬を放牧する備蓄牧とに区分し、王権膝下の近畿における後者の重要性を指摘した。近畿の馬牧は、都に収容しきれない貢上馬を放牧し、需給の調整弁となる小規模な備蓄牧として機能した。生産牧と備蓄牧の性格の違いを明確にし、馬の生産・運用・利用についてのモデルを提示できたことは、近畿古代牧に限らず日本古代牧研究においての成果であったと考える。遠国の大規模な生産牧と近畿の小規模な備蓄牧による馬の運用は、公的な牧のみならず私牧においてもなされ、8世紀には行われていたことを、史料や平城京木簡などから指摘した。また、軍団制の設置・停止など軍事的需要の高低により、畿内にも生産牧が置かれ、やがては廃止されるなどの変遷があった可能性を示した。

現地踏査を踏まえて大和国宇陀郡肥伊牧、摂津国豊島郡豊島牧、河内国大県郡坂門牧、同国若江郡辛嶋牧など、複数の近畿古代牧の現地比定を行ったことも成果である。未だ仮説の域を出ないが、今後、各比定地周辺において発掘調査などが行われる際には、牧の可能性も意識しつつ調査がなされることで、その痕跡が検出されることを期待したい。

本研究遂行において、各巡見先では現地研究者との活発な情報交換を行い、各地における牧研究への関心の高揚にも寄与できたと自負する。近畿の牧に留まらず、遠隔地の研究者との交流と協力の体制を築くことができたのも成果であり、今後も引き続き同様のスタイルでの研究を継続することの意義に確信を持った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

| | |
|--|------------------------|
| 1. 著者名 山中章 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 甲斐国の御牧「真衣野牧」の成立と展開 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 三重大史学 | 6. 最初と最後の頁 1 - 11 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 鷲森浩幸 | 4. 巻 52 |
| 2. 論文標題 大和国靈感寺と御霊信仰 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 日本文化史研究 | 6. 最初と最後の頁 85 - 101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 吉川敏子 | 4. 巻 38 |
| 2. 論文標題 河内国辛嶋牧についての考察 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 文化財学報 | 6. 最初と最後の頁 1、9 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 山中章 | 4. 巻 20 |
| 2. 論文標題 薦生牧・廣瀬牧に関する基礎的考察 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 三重大史学 | 6. 最初と最後の頁 1、13 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 吉川敏子 | 4. 巻 37 |
| 2. 論文標題 大和国宇陀郡の古代牧二題 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 文化財学報 | 6. 最初と最後の頁 13、25 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 吉川真司 | 4. 巻 235 |
| 2. 論文標題 日本古代のアブラナ科植物 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 アジア遊学 | 6. 最初と最後の頁 136、148 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 佐藤健太郎 |
| 2. 発表標題 日本古代の馬政と交通 |
| 3. 学会等名 古代交通史研究会 第20回大会 馬がつなぐ古代社会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

報告書を作成した。
『日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究 (課題番号 18K00979) 平成30年度～令和2年度 科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書』 (吉川敏子 2021年10月)
(内容構成)
吉川敏子「日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究」
「近畿古代牧変遷の概観 付: 近畿古代牧リスト (稿)」
鷺森浩幸「大和国西部の牧と馬」
吉川真司「河内国楠葉牧の再検討」
佐藤健太郎「鳥養牧について」
山中章「布施内親王墾田地から東寺垂水庄・垂水牧へ～条里型地割形成前後の摂津国垂水牧～」

共著の著書への掲載
吉川敏子「近畿の馬牧」 (佐々木虔一等編『馬と古代社会』八木書店、2021年)

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 吉川 真司 (YOSHIKAWA Shinji) (00212308) | 京都大学・文学研究科・教授 (14301) | |
| 研究分担者 | 小山田 宏一 (KOYAMADA Koichi) (00780181) | 奈良大学・文学部・教授 (34603) | |
| 研究分担者 | 鷲森 浩幸 (SAGIMORI Hiroyuki) (40441414) | 帝塚山大学・文学部・教授 (34601) | |
| 研究分担者 | 田中 俊明 (TANAKA Toshiaki) (50183067) | 公益財団法人古代学協会・その他部局等・客員研究員 (74306) | |
| 研究分担者 | 坂井 秀弥 (SAKAI Hideya) (50559317) | 奈良大学・文学部・教授 (34603) | |
| 研究分担者 | 藤本 悠 (HUJIMOTO Yu) (50609534) | 奈良大学・文学部・准教授 (34603) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 堀 信行 (HORI Nobuyuki) | | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 山中 章 (YAMANAKA Akira) | | |
| 研究協力者 | 清水 みき (SHIMIZU Miki) | | |
| 研究協力者 | 佐藤 健太郎 (SATO Kentaro) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |